　　　　　　　令和4年度　学校評価の結果について　令和５年２月２１日

|  |
| --- |
| 12月に実施した学校評価アンケート（保護者・児童・教職員）の結果を以下のようにまとめましたのでご覧ください。  　結果は、保護者と児童の比較を中心にグラフで表しています。項目に合わせて、教職員も含めて比較をしています。  １）回 答 者（人数）：保護者（９５名／未回答１０名）児童（１０３名）教職員（１５名）」  ２）質問項目　 グラフの上記に記載  ３）評 価（４段階評価：「A」「B」「C」「D」）  **・積極的・肯定的な評価＝**「A」そう思う・あてはまる  「B」だいたいそう思う・だいたいあてはまる  **・消極的・否定的な評価**＝「C」あまりそう思わない・あまりあてはまらない  「D」そう思わない・あてはまらない |

1. 学校は楽しい

保護者「お子様は、楽しく学校にいっている。」

児　童「学校は楽しいですか。」

「学校は楽しい」は、児童、保護者ともに「A」・「B」評価を合わせて90％以上で高い割合を今年度も示した。児童は、学校は楽しい場所であると感じ、保護者はお子様が楽しく学校に通っていると感じている。昨年度に比べ、保護者の「A」評価の割合が−24.6pt.となっていることが気になる。また、約８％の児童が「C」・「D」評価を回答しており、「勉強関係」「友人関係」が要因と考えられる。学校生活を楽しく送るために、学校や学級の雰囲気づくりを大切にしていきたい。

② 「あいさつ」

教職員「児童は、自分からあいさつしている」

保護者「お子様はあいさつをしている」

児　童「自分から友達や先生、地域の人たちにあいさつができている」

「あいさつ」は、児童は「A」＋「B」の肯定的評価(85.4%)が高くあいさができていると回答している。保護者は昨年度と比較して「A」評価が−9pt.で「D」評価が＋10.8pt.高くなっいることから、お子様のあいさつができていないと感じているとが伺える。教職員の評価は「B」評価が40％と「C」評価が60％と分かれ、あいさつを自分からする児童とそうではない児童の二極化が見られる。あいさつしている児童のなかでも、自分からあいさつをするのではなく、あいさつを返す側の児童が目立つ。また、顔を見て（目を合わして）のあいさつする児童が少ない。最近では、低学年の児童の方があいさつをしない傾向が見られる。

このようなことから、以下のようなことに取り組んでいきたい。

①名前を呼んであいさつをする。（「〇〇さん、おはよう。」）

②明るい声や表情であいさつをしていく。

③あいさつしている児童を、みんなの前で褒めていく。

④教職員が見本となってもっと積極的にあいさつをしていく。

（元気なあいさつ・気持ちのよいあいさつ）

⑤あいさつの大切さを集会や学級等で指導していく。（特に低学年）

③ 「話を聞き、相談にのってくれる」

保護者「学校は保護者の話を聞き、相談に乗ってくれる。」

児　童「何かあったときに先生にたずねたり、相談したりできますか。」

「話を聞き、相談にのってくれる」では、保護者で肯定的な評価（「A」＋「B」）が約95％、児童で約83％という高い評価であった。このことから児童にとって先生は話しやすく感じていることから、児童と先生との良好な関係が築かれてきている。児童の否定的な評価（「C」＋「D」）は昨年度と同等であるが「D」評価が半減した。限られた時間の中で上手く時間調整を図りながら児童と過ごすことを心がけていることが考えられる。また、一昨年度から城東っ子面談を実施して、担任が全児童と面談する時間を設けていることが考えられる。

今後も児童、保護者との良好な関係を築きながらより一層信頼される学校づくりに向けて教職員ひとりひとりが心掛けていく。

④ 「基礎学力の定着」

教職員「児童は、基礎・基本の力がついていますか。」

保護者「お子様は、読み・書き・計算など基礎・基本の力がついてきていますか。」

「基礎学力の定着」は、約84％（「A」＋「B」）で保護者はお子様に基礎学力がついてきていると回答している。一方で、昨年度から「A」評価が−10pt.となり「C」評価が＋10pt.と高くなっていることから、基礎・基本の力が付いていなと感じている保護者の方もいる。教職員も肯定的な評価は69％と昨年度と同程度であるが、「A」評価（0％）がなかった。「C」評価は昨年と同程度（約30%）で、学習の理解が不十分で、計算力・読解力が身に付いていない児童がいるとの認識である。そのような児童を中心に積み残しが多くなってきていることが課題である。そのような児童に対しては、今年度からがんばり学びタイム（木曜日の放課後）に学力を補充する時間を設定している。低学年では、カタカナが苦手な児童も多くいるので書写の時間や宿題などで何度も練習する機会を設けている。端末を利用して、タブレットドリルを活用する取り組みも行い基礎的・基本的な力の定着を図っている。PC端末のローマ字入力を活用することで、ローマ字を覚えるきっかけとなり、ローマ字を早く正確に覚えることができるようになってきた。学力低位な児童ほど学習理解に時間を費やし、学習の積み残しが多くなるため、休み時間などに個別に指導したり、家庭との連携を図りながらフォローしたりして、児童の学習意欲が低下しないように努めていく。

⑤ 「わかりやすい授業」

教職員「わかりやすい授業づくりを行っている。」

保護者「学校は、わかりやすい授業に努めている。」

児　童「授業はわかりやすいですか。」

「わかりやすい授業」は、児童は肯定的な評価（「A」＋「B」）で93％（昨年度同等）、保護者は97％（昨年度同等）という非常に高い割合を示した。わかりやすい授業と評価してもらえることは、教職員にとって大変嬉しく励みとなる。教職員の評価では「C」評価が15.7 ％と昨年度より半減した。昨年度からGIGAスクール構想により一人一台端末（タブレットPC）を活用したが授業づくりの研修を重ねて授業実践に取り組んできた。児童にとってもPCを使用した授業はわかりやすいとのICTアンケートの結果が示したように、授業改善が図られているのが要因の一つを考える。今後は、端末（タブレットPC）を使った授業がスタンダードとなるが、デジタルとアナログの両者の良さを融合させながら、これまで以上にわかりやすい授業を目指して、全職員が授業改善の研修を進めていく。

⑥ 「安心・安全な学校」

　教職員「安全についての取り組みを行い、環境整備に努めている。」

保護者「学校は、安全・安心な環境が整っている。」

児　童「安全や健康に気をつけて学校生活が送れていますか。」

「安心・安全な学校」は、児童が「A」「B」評価という非常に高い割合を示している。しかし、校舎内を走る、天候が悪いときに校舎内で暴れている児童が目立つことがある。また、ヒヤリ・ハットする場面もある。休み時間にあとには、保健室で手当てを受ける児童も多くいるように感じる。そのために安全指導の機会を増やしながら大きなけがや事故が起きないように未然防止に努め、今以上の児童の安全意識の向上を図る。保護者は、安心・安全な環境が整っていることを高く評価している。保護者の方は、安心・安全な学校にお子様を通わせたいのは当然である。そのため教職員は、安全管理をより徹底して、児童の安心・安全を確保していくようにしていく。本校では、月１回の安全点検を実施し、必要に応じて修繕を行っている。費用が生じる修繕等については、市教委などに要望している。今年度も定期的な避難訓練（火災２回・地震１回）や大雨を想定した引き渡し訓練を実施した。長期休業前には、交通安全や防犯などの安全指導を通して、児童の安全意識を高めるよう啓発に努めている。児童の安全意識が高まってきていても、安全な行動につながっていないこともある。特に天候が悪い日には、校舎内での過ごし方が気になることがあるので、見かけた教職員が注意や声かけをしていきながら安全な生活が送れるようにしていく。

⑦ 「体を動かして遊ぶ」

教職員「児童は、元気に体を動かして遊んでいる。」

保護者「お子様は、体を動かし元気に遊んでいる。」

児 童「元気に体を動かして遊んでいますか。」

「体を動かして遊ぶ」は、今年度も３者全てで、肯定的な評価（「A」＋「B」）の割合が非常に高い。しかし、「C」評価は、それぞれで約10％あることから、体を十分に動かせていない児童もいることが読み取れる。学校では体を動かして遊べるサンマ＝３つの間（時間・空間・仲間）が整っているが、家庭ではサンマの減少が見られる。習い事など時間の制約、さらにはPCゲームで遊ぶ楽しさが勝ることもあり学校の休み時間は児童にとって貴重な時間である。また、体育授業では、いろいろな運動を通して「体を動かす楽しさ」や「運動の楽しさ」に触れさせ、体を動かす契機にしたい。本校の児童の多くは、体を動かし学年を越えて遊ぶ姿も見られる。一方で、高学年になれば休み時間に委員会の常時活動があるため、低・中学年に比べると、運動場に出て遊ぶことをする児童は少なく感じる。児童にとって友だちと遊ぶことは学校生活を過ごすなかでも楽しい時間である。そのため、朝・業間・昼休みの確保を大切にしていきたい。

⑧「規則正しい生活」

教職員「児童は、早寝・早起き・朝ごはんの定着が図られている。」

保護者「お子様は、規則正しい生活が送れている。」

児　童「早寝・早起き・朝ごはんの規則正しい生活が送られている。」

「規則正しい生活」は、保護者の「A」・「B」評価は、昨年度と同程度であったが、「A」評価がまいな-12pt.であった。児童の「C」評価が、昨年度より-７pt.であった。実態把握のためのアンケートは実施していないため、具体的な家庭の様子はわからないが、一部の児童で、「朝ごはん、食べていない。」というような声も聞くことがあったり、夜遅いテレビ番組の話をしていたり、夜遅くまでゲームをしていたり、就寝時刻が遅くなり起床ができず登校の集合時刻に遅刻するなどする児童もいる。このようなことから、普段の生活から意識できるように児童への指導（食育や保健学習など）や家庭に啓発をしていきたい。

⑨「仲のよい友だち」

　保護者「お子様は、学校に仲のよい友だちがいる。」

児　童「遊んだり話をしたりする、仲のよい友だちが学校にいますか。」

「仲のよい友だち」は、児童の85％以上が肯定的な評価（「A」＋「B」）であるが、昨年度より「A」評価は−15Pt.であった。「C」＋「D」評価で約10％（昨年度2.7％）と数値が高くなっていることが気にかかる。また、保護者のほとんどがお子様に仲のよい友だちがいると回答している（昨年と同等の評価）。児童は１日の長い時間、学校で生活するため、楽しく学校生活、楽しく学習や運動、遊びなどをして生活していくためにも仲のよい友達は大切な存在である。小規模校の本校では、幼稚園から単学級のため、みんなと仲良くなれたり、深い人間関係が築かれたりしやすい。一方で、人間関係が広がりにくく固定化や、固定観念（思い込み）で人を見てしまうこともある。そのため、些細なことが契機に関係性が崩れることがあり、様々な問題へと発展していく可能性があるので、教職員は普段から児童の様子を見ていくなかで、小さな変化に気がつけるように高くアンテナを立て、児童に接していかなければならない。

⑩「苦手なことにチャレンジ」

教職員「児童は、苦手なことにチャレンジしている。」

保護者「お子様は、苦手なことにチャレンジしようとしている。」

児　童「苦手なことにもチャレンジしていますか。」

「苦手なことにチャレンジ」は、児童は77％（「A」＋「B」）が積極的な回答を示し、が昨年度より＋6pt.で、消極的な回答（「C」＋「D」）が22％（昨年度-7pt.）であった。児童は苦手なことへのチャレンジの意識が高まりつつあると考える。苦手なことにチャレンジする児童が増えていることはとても嬉しいことである。児童には、いろいろなことにチャレンジ中で、成功経験だけでなく失敗の経験も大切にして、自分の夢や目標の実現につなげてほしい。そのため、学校では学年に応じてたくさんの成功や失敗の経験を積み重ねながら、粘り強く最後まで取り組める児童を育てていきたい。